

北西海岸インディアンと博物館：多文化主義の国 ・カナダの事例から（特集：北米・北西海岸?）

著者	齋藤 玲子
雑誌名	北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌「アークティック・サークル」
巻	68
ページ	4-9
発行年	2008-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/5241

特集 北米・北西海岸②

北西海岸インディアンと博物館 ～多文化主義の国・カナダの事例から

さいとう れいこ
齋藤 玲子

北海道立北方民族博物館 主任学芸員



写真1 パンクーバー空港に展示されているハイダの著名なアーティスト、ビル・リードの作品「Spirit of the Haida Gwaii」(1994)

はじめに

北京オリンピックが終わり、次は二〇一〇年にカナダで開催される冬季五輪だ。このバンクーバー大会の公式エンブレムはイヌイトのイヌクシユク（人型の石積み塚／写真7）で、マスケットには先住民の神話や伝説に登場する動物などをモチーフにしたものもある。開催にあたっては、「サステイナビリティ（社会・経済、そして環境にとつての持続可能性）」と先住民の参加」が謳われている。

今から二〇年前の一九八八年、カルガリー・オリンピックの記念行事として企画された展示に対し、現地の先住民らがボイコットをするという出来事があった。グレンボウ博物館（Glenbow Museum）で行なわれた特別展「精霊はうたうーカナダ先住民の芸術的伝統（The Spirit Sings: Artistic Traditions of Canada's First Peoples）」で、展示の対象となっていたクリーの一集団ルビコンは、先住権をめぐるカナダ政府との交渉が行き詰まっていたことを背景に、彼らの居住地で油田開発を進めている石油会社と森林伐採を進めようとしていた日本の製紙会社が展示の後援団体になっていたことや、

さらに展示の内容が一七〜一八世紀の資料を中心としており、現代の問題が等閑視されていたことなどに不満を表明した。

ルビコンの抗議は国内外の注目を集め、資料協力を予定していたアメリカやドイツの博物館が提供を見合わせ、カナダ民族学会なども展示そのもののボイコットを呼びかけるまでに事態がこじれた。この出来事は博物館や民族学に関わる者の間で、大きな波紋を呼んだ。

北米では一九七〇年代から、博物館は、先住民の物を収奪し、ステレオタイプな展示によって旧態依然としたイメージを植えつけてしまうという批判が持ちあがっていた。一方、言うまでもなく、博物館は貴重な資料を保存するとともに、文化の復興を支援し、普及・啓発する役割も担ってきている。

本稿では、北西海岸インディアンと呼ばれてきた人びととカナダの博物館との関係について紹介し、そこから見えることについて考えてみたい。

カナダの博物館と先住民

ブリティッシュ・コロンビア（以下、BC）州の博物館で、その地にくらす北西海岸インディアン文化が展示されるのは当然である。しかし、西海岸から遠く離れたオタワやトロントといったカナダの首都圏やニューヨークなどアメリカ合衆国の都市ばかりか、ヨーロッパにおいても、北西海岸のトーテムポールや仮

面などが主要な展示資料となっている博物館・美術館がある。むしろ、カナダ国内よりも、海外の方が先に北西海岸の民族資料を高く評価していたとも言われる。

人類学者らは、その学問の黎明期ともいえる一九世紀から、階層社会や複雑な儀礼、独特の芸術様式など北西海岸インディアン文化について着目していた。

また、探検家や交易商人らは、それ以前から工芸品などを収集していた。博物館が北西海岸インディアンの資料を展示公開してきたのは、そうしたコレクションや調査・研究の蓄積とともに、強烈な印象を与え、異形ともいえるその物質文化が、人びとの関心を集めるものであったからかもしれない。

一九六〇～七〇年代

先住民への関心・配慮の高まり

カナダでは、一九七〇年代初めに、多文化主義が国の政策として採択された。この頃、民権運動も高まりを見せ、先住民への配慮も次第に拡充していった。

『ミュージアムの政治学 カナダの多文化主義と国民文化』(二〇〇三)のなかで、著者の溝上智恵子氏は、一九六七年の連邦百周年を記念して開催されたモントリオール万博をインディアン・アートが国内外に公的に認知されるようになって

た契機と位置づけている。先住民らが自らの手で企画・展示した「カナダのインディアン」パビリオンでは、巨大な壁画をジョージ・クラテシというヌートカ(ヌチャヌルス)の作家が描き、トーマスポールはクワキウトル(クワクワカワックウ)のハント親子・トニー&ヘンリーが制作するなど、先住民の現代アートが前面に出された。パビリオン内部には、国立博物館などから貸し出された民族資料が、作品として個別のケースに展示された。

なお、展示にあたり、インディアンの児童をめぐる教育についてなど、インディアン代表者とインディアン省(当時)の意見が対立することもあったという。両者の見解はそのまま展示され、以後、両論併記のスタイルは、博物館でも採用されるようになった。

また、連邦政府とインディアン省は、百周年記念の期間中に訪問する来賓や高官への贈答品としてインディアン・アートを選定した。これは、政府が先住民のアートを認知したということであり、展示に加え、大きな意味をもった。

一九八〇年代以降

先住民との協同による展示

グレンボウ博物館の「精霊はうたう」展のбойコットが起きる前、一九八〇年

代半ばにはカナダ博物館協会など全国組織の場で先住民文化コレクションの取り扱いや、共同作業に関する議論が始まっていた。たとえば、カナダ博物館協会発行の『ミュージズ(MUSE)』誌では、先住民に関する特集がいく度か組まれ、過去のステレオタイプからの脱却や資料の所属・返還に関する論評や事例報告が展開されている。

グレンボウ博物館の一件を受け、連邦政府は博物館と先住民に関する特別委員会(task force)を設けた。その後、カナダ博物館協会と先住民団体は協同して、先住民資料の重要性の再認識、展示等への介入、先住民が利用する際の便宜、資料返還、先住民の研修などを進めてきた。同じ頃、アメリカ合衆国では一九八九年に「アメリカインディアン国立博物館法」、九〇年に「アメリカ先住民墳墓保護返還法」が制定され、先住民の遺骨や埋葬品等の売買を禁止し、博物館や研究機関にも関連資料のリストの作成と返還を義務付けた。

こうして北米の博物館では、先住民の遺した物を適切に扱う取り決めがなされていた。一九九〇年代には、特別展などの企画においては、文化人類学者と先住民のアーティスト(または文化保持者)をキュレーター(学芸員)として雇用す

るのが、スタンダード・モデルとなった。さらに進んで、近年のカナダでは、先住民自身が博物館を運営するためのサポート・プログラムが、国立博物館での研修など、政府の公的助成で行なわれてきている。また、少数の個人を雇用するだけでなく、先住民議会と議定書を交わし、多くの関係者を取り込んだ委員会方式などによって展示の企画・実施をするケースも出てきている。

北西海岸先住民と五つの博物館

さて、これまでの経緯を振り返るばかりでなく、実際の博物館の様子についても紹介したい。筆者は二〇〇二〜〇五年に科学研究費補助金による調査(課題「カナダにおける先住民のメディアの活用とその社会・文化的影響」代表スチュアート・ヘンリ・放送大学教授)でカナダの博物館を訪問した。それらのうち、次の五館について取り上げる。

カナダ文明博物館

首都オタワに隣接するケベック州ガティノー(旧ハル)市に、カナダ文明博物館(Canadian Museum of Civilization)がある。前身はオタワにあった国立人類博物館(National Museum of Man)で、その土地および建物は自然史博物館に引

き継がれ、文明博物館は新たに建築され一九八九年に公開された。初代館長は北西海岸インディアン文化を専門とする研究者であった。最近の年間来館者数は約一三〇万人である。

文明博物館の当初の常設展は1階のグランド・ホール、3階のカナダ・ホール、そして2階の子供博物館と郵便博物館であった。カナダ・ホールはカナダの歴史を展示しているが、先住民との関係は毛皮交易などに限られたものだ。一方、グランド・ホールには、北西海岸の六つの集団の住居を復元し、内部には各集団に特徴的な資料などを展示している。大型の家と数々のトーテムポールなどその展示は圧巻である(写真2)。生活全体を概説するようなものではなく、それぞれの集団が主張したい事柄を重点的に取り上げている。この展示には、企画段階から先住民が委員として加わっていた。

また、二〇〇三年にオープンしたファースト・ピープルズ・ホール(First Peoples Hall)は、先述の博物館と先住民に関する特別委員会の勧告の結果としてできたものだ。約五年で作られたグランド・ホールに比べ、イヌイトや他のインディアン(ファースト・ネーションズ)、メティ(インディアンの女性と毛皮交易商人らヨーロッパ人男性との間に生まれた子の子孫)

をも含んだこの展示ホールは一〇年以上の長い歳月をかけてようやく完成に至った。広範な地域の事情の異なる集団の意見をまとめるのは困難で、構想に時間がかかったようである。

その展示のコンセプトは、次の四つの主張「私たちは今もここに生きている」「私たちは貢献する」「私たちは多様である」「私たちは古代から土地との結びつきを有する」である。これら四つの柱のうち「今もここに生きている」「多様である」というテーマは、複数の先住民を登場させ「顔の見える展示」とも呼べる手法が採られている。写真と文字パネルあるいはモニターを利用した動画等で「私はこんな生活・活動をしている」「私はこう考える」と複数の人物に語らせる(写真3)。また、「貢献する」「土地との結びつき」というテーマは、自然に対する先住民の知恵が現在の環境問題解決のヒントになる、といった現代的な話題に結びつけ、伝統的な生活のみを過去のものとして扱わない配慮がなされている。

国立博物館のこうした展示は、観覧者から国の姿勢を反映しているものと見られるだろう。

ロイヤルBC博物館

BCの州都ビクトリアにあるロイヤル



写真2 文明博物館のグランド・ホール



写真3 文明博物館のファースト・ピープルズ・ホール



写真4 ロイヤルBC博物館に隣接するサンダーバード公園。住居とトーテムポールの建立はM. マーティンが指揮を執った。



写真5 クウツウン文化・会議センターの入口



写真6 ウミスタ文化センターの前に立つトーテムポール。奥の古い建物は寄宿学校で、現在は民族団体の事務所として使われている。



写真7 オタワ空港に展示されているイヌクシュク

BC博物館は(Royal British Columbia Museum)は一八八六年設立、一九六八年現在の場所に移転し、七五年に先住民展示室(First Peoples Gallery)がオープンした。年間の観覧者数は四〇〇五〇万人である。展示は、北西海岸の先住民について、欧米人の到来以前と以後の変化を軸に、生業・儀礼などの概略が網羅的に紹介されている。復元された住居(ロングハウス)や古老の語りに合わせて仮面が動く展示など、先住民の協力的な面は実現できない大掛かりなものがある。

新設の展示室の一つに、長い交渉の末、二〇〇〇年に自治権を獲得したニシユガの人びとに関するものがある。ロイヤルBC博物館や他館に所蔵されている彼らの民族資料は返還されることになったが、実際には所有権のみが自治政府に返還され、実物資料の多くはそのまま博物館に残された。両者が共同で資料を保管、企画・展示を行うという体制の下、二〇〇二年に新たなコーナーが完成し、ニシユガの条約や現在の人びとの様子等が紹介されている。

ちなみに同館では、ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館に雇用されていたクワキウトルの彫刻家ムンゴ・マーティン(一九七九―一六二)を五年から招聘、資料の制作等を依頼した。マーティ

ンは自らの制作活動のほか、ハント親子ら彫刻家の育成に晩年を費やした(写真4)。モントリオール万博以前のことである。

ブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)人類学博物館

カナダの西の玄関口バンクーバーにあるUBC人類学博物館(Museum of Anthropology at University of British Columbia)は、一九四九年開館、一九七六年現在の場所に移転してリニューアル・オープンした。展示室内には古い儀礼具が多数ある一方、現代の作家の作品も置かれ、芸術の伝統を強調したものとなっている。小さめの日用品等は、收藏展示として、引き出し状の展示ケース等に収められ、多数が公開されている(写真8)。また、野外にはハイダの住居などが復元されており、館内からもガラス越しに見ることができ。

この屋外展示をはじめ、作家らを招き、その制作の様子を見せ、解説を行うなど、しばしばワークショップを行っている。

今年九月から半年ほど休館し、リニューアルが行われている。先住民が博物館に來て資料を調査したり、復元作業を行ったりするスペースを充実させるとのことである。

ウミスタ文化センター

ウミスタ文化センター(U'mista Cultural Centre)は、一九八〇年に開館したクワキウトルが運営する施設である。同センター初代館長のグロリア・ウエプスター氏は、UBC人類学博物館で勤務経験を積んだ後、一九七五年に故郷のアラートベイ(バンクーバー島北部の島)に戻った。ポトラッチ(儀礼的な供宴)が禁止されていた一九二一年末に父親らがポトラッチを催行したため、翌年政府に半強制的に収容された祭祀具等について、彼女は資料返還運動を行なった。その結果、オタワやトロントなど主要な博物館から同意を獲得し、開催当時の関係者が多く



写真8 UBC人類学博物館の收藏展示

集住する二つの地域に博物館が建設され、返還されることとなった。一九七九年開館のクワギウルス博物館 (Kwaguitin Museum) と、八〇年開館のウミスタ文化センターである (写真6)。

同センターのメイン展示は、「返還された「ポトラッチ・コレクション」で、建物奥の伝統的住居をイメージした広間の壁沿いに、仮面や儀礼具が並べられている (展示室内は撮影禁止)。導入部分では、考古資料、古写真、日用品や狩猟・漁労具などとともに、海外の先住民らとの交流を示す写真や工芸品なども展示されている。

アラートベイは交通の便利などころではなく、年間の来館者は約一万人という。展示よりもむしろ言語復興の活動や出版などに力が注がれている。

クウツウン文化・会議センター

もう一つ、タイプの異なる施設について紹介したい。州都ビクトリアから車で一時間ほどの町・ダンカンにクウツウン文化・会議センター (Kw'wutsun Cultural and Conference Centre) がある (写真5)。ここは、野外博物館のようであり、敷地内には川が流れ、トーテムポールもいくつもある。展示棟のほか、映像ホール、ショップを兼ねたギャラリー

や、ワークショップや会議を行える研修棟、アトリエ、レストラン、バーベキューコーナーなどもある。ガイドツアーを行っており、パンフレットも七ヶ国語を用意するなど、観光客向けという印象のこの施設は、年間四万五千人ほどの利用者があ

る。ダンカンはカウチン・セーターで知られる、海岸セイリツシュの一集団カウチャン (Cowichan) の居住地である。毛編み製品の収入があるカウチャンたちは、その地の利も活かし、このような施設を運営できるというわけだ。祖先が残した文化の保存と継承を趣旨とするウミスタ文化センターとは、ある意味で対照的と言える。

カナダの博物館に学ぶ

国立博物館、大学博物館、先住民による運営館など異なるタイプの施設を見てきた。現在の先住民たちの置かれている状況もそれぞれの主張も多様であり、それぞれの博物館等で表象する先住民 (文化) 像も多様である。現在の展示は、これまでの批判や反省をもとに、先住民族を固定的なイメージに押し込めず、多様であることをそのまま表すという姿勢が主流であるように見える。特に中立的な立場にある公の博物館では、それが最善

の方法なのかもしれない。

博物館は、テレビや新聞等のマスメディアとは比較にならないほど少数への影響力しかない。それでも毎年数百・数十万人びとがこれらの展示を見るならば、先住民文化が今も息づき、カナダの文化を豊かにしているという印象は確実に浸透してゆくだろう。

日本は今年、アイヌを先住民族とする国会決議が採択されたにもかかわらず、いまだに無理解な発言がある。同じ六月、カナダ首相は同化のために先住民の子供たちを強制的に寄宿学校に入学させた過去について謝罪した。政府は既に被害者救済の対策として、カウチン・セーターや職業訓練と教育を実施するための基金を設けている。財団は、写真展「子供たちはどこへ消えたのか (Where are the Children? Healing the Legacy of Residential School)」を企画し、事実を国民に知らせるため二〇二〇〜二〇二五年にかけて巡回させた。筆者はUBC人類学博物館でこの展示を見て、先住民に関する歴史への反省と贖罪の意図を感じとった。

日本は先住民について知り、考える機会が少ない。カナダを真似れば良いとは思わないが、何もしないより、できることから始められないか。カナダの博物館に学ぶことは、少なくない。